

山雅俊、義家と貞任、山下晴楓、石川啄木、浅野晴風、吟詠、中村松声。

三位研修同志会 五月二十六日 屋三鷹市第十四回例会 上連雀公会堂。白虎隊、呉究静軒、城山、富田清朗、彰義隊、清水源城、狂女、田戸桜丸、橋大隊長、坂本錦造、似蛾、伊集院鼓城、小松の操、伊集院牙城、以上演奏のあと座談会に移り散会した。尚三ヶ月例会で「似蛾、西郷天風」とあるは誤記につき取消。

日本琵琶振興会 五月二十六日 一時一八五月親睦研究会 時東京新宿州楓会館(会長鈴木流泉氏。長篇詩(五分十分)の吟詠と短篇琵琶(十分以内)の演奏会を開催。尚故吉水錦翁顧問の後任として詩人大野恵造氏新たに顧問就任。又当日新琵琶楽器第三号が参加者に披露された。

日本芸術琵琶 五月二十六日 昼東京西柏会月例研究会 新宿柏ビル六階。お江戸日本橋、門琵琶、山崎錦幽、川中島、青木晴城、湖水乗切、関口脩声、絃脩水、壇の浦、山本隆水、恩響の彼方へ、脩水、錦舟、安宅、若宮旭登、小野訓導、来賓前田洲月、敦盛、石田脩水、本能寺、長谷川錦舟。

同会は本年一月創立、石田、長谷川、若宮、山本、山崎、小沢錦弥、若林杏雨、青木千春、日比ノズ子、日原錦楼、関口半蔵、杉山旗水、谷内吉平、會長雨宮忠の十四氏で組織され事務所を新宿区西新宿七ノ一五ノ一柏ビル内に置き毎月一回例会が右事務所で開催される。六月は十六日(日)一時一七時開催の予定。世話人山崎錦幽氏。

ラデオで 五月二十七日夜九時NHK第琵琶放送 一ラデオで原島旭姓女史が「夜討曾我」を放送された。

京都琵琶協会 六月二日 一時から会員梅六月定期集會 原島篤女史宅で開催。安宅一戸田旭公、扇の的、田中鵬水、曲垣平九郎、矢吹旭美津、別れの盃、安住旭康、常陸丸、上、牧南水、巴の前、古谷寛水、本能寺、木村維水、常陸丸、水内媿水、畠山重臣、平井春嶺、寂光院、植村實水、以上演奏のあと青森市の津軽琵琶宗家柴田富山氏から京絃社に贈られた「石童丸」のテープを一同で鑑賞し、七月京都祇園祭協賛恒例八坂神社献奏会の打合せなどをして水内女史寄贈のビールで乾盃し八時散会した。

熱海梧水氏の 一水会秋田支部の前支部 兼 長熱海梧水氏は永年更生保護事業に保護司として、又民生委員、町内会長など大きく世に貢献された功蹟に対し六月六日藍綬褒章受賞の栄に浴された。

○京都琵琶協会七月定期茶話会 七月七日(日)午後一時会員平井春嶺氏宅。欠席者は当日午前中に必ず御連絡下さい。(常任理事は十一時迄に参集のこと)。
○女流琵琶さつき会演奏会 七月二十一日(日)昼大阪天神筋朝陽会館。
○京都祇園祭協賛八坂神社恒例奉納演奏会 七月二十三日(火)夕四時半同神社能楽堂協賛京都琵琶協会。旭濤、旭美津、雨門下生の外抽籤により左記順演奏(十時終演の予定)。

予 告
昭和四十九年七月一日発行 (非売品) 編集者 植村 寛 水 発行所 京 絃 高槻市津之江北町一ノ二 電話〇七二六(八五)六〇五一

予定) 別れの盃、安住旭康、大楠公一、田中鵬水、新撰組、植村實水、城山、阪本一峰、戦艦大和、矢吹旭美津、元寇、平井春嶺、安宅、梅原旭濤、本能寺、(来賓)横須賀、齊藤妹水、加藤清正、古谷寛水、坂崎出羽守、木村維水、那須与市、戸田旭公。
○藤原琵琶四明会納涼一泊会 八月十九日 浜松林業の家(次号詳報、一般参加歓迎)。
○京都琵琶協会旅行会 八月二十三日から五泊六日北海道琵琶親善旅行(次号詳報)。

あ 卵の花の匂う垣根にほととぎす、き とうとうと梅雨の昨今、皆さまご機嫌如何ですか、未だしばらく蒸し暑い毎日が続きましよう、充分ご自愛下さい。京絃二十周年を迎え各方面から身に余るお褒めや激励の御祝詞を沢山頂戴して編集者は只々感激している。折角の御厚志に背き六月号、七月号に全部を登載することが出来ず、あと数篇は八月号に載せさせて頂くことになった、悪からず御寛容を賜りたい。明八月号は例年の通り紙数を倍増して銷夏特別号として琵琶同好の方々の参考となる記事を満載し御期待に副うべく編集者は今から準備おささ怠りなく慎重に想をねっている。また暑中交礼の貴名掲載に想を飾りつけて貰って併せて同好相互の健康を喜び合せて貰いたいと念願している。どうか万障お繰り合せの上奮ってお申込み下さるようお願い申し上げます。

身の小僧ならぬ中僧がいた。 かつて上州館林に居た頃、度々水戸の琵琶会に出演したことは前述の通りだが、其頃のファンが目と鼻の先に居るとは洵に縁は異な物で、私は兜をぬぐしかなかった。 そこで話は進み、一夜八咫家の二階で演奏を試みることもなり、久しぶりで琵琶を抱くのも楽しく、乗気にならざるを得なかった。 それから数日後、八咫家の主人は下谷あたりから琵琶を一面借りて来たが、それが亦中々の尤物で、と撓々々が洵に心地よく、歌もはずんで「川中島」や「常陸丸」「城山」など当時一般に喜ばれた曲を演奏したが、程なくその年も暮れ、明くれば大正四年の正月五日頃、それも閉店間際に私への電話がかゝった。この店に就職したことを知る人はいない筈ひよっとしたら小原が又どうかしたのでは、と気づかぬが受話器を取れば「前ですよ前の八咫家です」と店の者に気兼ねしてか漸く聞き取れる程のひそひそ声で「今晩是非話したいことが出来たので必ず来るように」と念を押すのであった。

琵琶 機関紙 京 絃 第二四一号 京 絃 社

我が道を行く六十五年(一七)

西 郷 天 風



それが突如として銀座通りの大商店、十四名の店員を擁する四階建の呉服店に、一躍五番々頭となって商人の仲間入した私は帳場の机に一日中、十時間もの端座は洵に苦難の日だった。朝八時には帳場に坐り、四時間後の昼食時には既に足がしびれて立ちあがるのに一苦労、漸く食膳に着いても店員達の手前膝を崩すこともならず、やっと帳場へ戻った時の苦痛は三、四十里も歩き続けたと同様に底筆紙につくし難い、勢い胡座(あくら)をかき、足を机の下に投出すなどしてもそれは一時逃れの気休めにすぎず、二、三度後には功を失い遂には店さきの道路に飛出すなどして、しびれのなおるのを待つしかない、この有様を毎日繰返す悩みを見るに見かねたのであろう、一番々頭の吉田は、若旦那に頼んで当分の専断は黙認、となった。

この店の前、つまり銀座通りを隔てた向側の正面に八咫家と云う額縁店、(今は西銀座通り岩城めがね店隣に移る)があり、入口

に数十枚の肉筆絵葉書(当時の洋画界の中堅織田一磨氏筆水彩画)が掲示されて人目を惹いていた。売行きもよいらしく毎日約半数は新らしくなるので眼の保養にもなり、足を運ぶにもよい口実ともなった。時には二、三枚求めることになって八咫家の主人と懇意にもなり、やがて茶舌友達となって閉店後座敷に上る程親しくなった。この主人岩松氏は中々話題が豊富で話も巧だったが、それにも増して間口二間にも足らぬ小店舗に似合わず、宮内省御用商でもあったことは一驚に価するものであった。

或日例によって茶談の折意外な話を持出した、私の琵琶を披露せよと云うのである。私が松屋呉服店に就職してまだ一ヶ月余り、琵琶を弾くことなど誰一人知る者はない筈と思いい笑に付したが、中々承知せず「隣りにあなたの方角が居り、その話に間違はない」と云う、八咫家の右隣は相模屋と云う海産物店で銀座でも大商店の方だが、そこに水戸出

その語気には何かよい事を含むやに聞き取れ、夕食もそこそこ八咫家へ走れば、八咫家の主人は酒肴を前にして待ちあぐんでいたが、其顔色には喜びが溢れて見えた。 今日大民へ年賀にいった際、偶々先夜の琵琶の話となるや大民も殊の外興味をもち、来る二月十一日の紀元節には使用人全員の慰安会をかねた小宴を催し、そこで琵琶の演奏を

狂醉亭漫録 (第百一) 大坂落城異聞 (一)



古谷 竟水

聞くようにしたいからよろしく頼むというのに引受けてしまった。あなたの都合も聞かずに取きめて洵に申訳ない次第だが、これはあなたの将来にとって運命を開く第一歩となるかも知れず、躊躇すべきでないと思つてのことでは非共承知して頂き度い。大民のことは既に御存じかも知らんが、天皇陛下の御元服に際し大元帥の軍服調製の任に当り、兩來宮中の洋装は総て大民が一手に承つておる有力者で、若しあなたが大民の氣に入りとなれば、それこそ琵琶界を牛耳る名門となること疑いなしですよ」と一人悦に入つていた。

宮中の御用を承る大民では、紀元節には毎年何かの催しをする慣習がある由にて、その年は琵琶を中心の豪華なものだった。奥の二間二十畳余りを会場に当て、裁縫台を重ねてそれに緋のラシヤを敷きつめ、二尺大の花瓶を配した演奏台は美事なステイジだった。

曲は「松嶺」に始まり、次いで主人の望みにより「旅順開城」上下と「瀋陽江」の順だったが、斯道に造詣深い大民主人は殊の外大満悦で、翌日八咫家を通しての謝礼は実に意表をついたものだった。それは銀座の錦凌堂特製の文箱形名刺大銀の小函で、それに純金の菊形御紋章や桜の小枝をチリパメでドッソリと重味があり、更に三百円の墨付も添えてあった。

この御紋章入小函は皇族方御催しの宴に際し、御引出物として下賜される御菓子入器で、家族への御土産を、の思召による出拝開し、家宝として子孫に伝えることにした。

近年、落城直前の大坂城内の動静を主材にした歴史小説が刊行され、脚色は多いが時代考証や登場人物も大体その坪を得ているので、今回は之を参考に、従来知られていない事実を主に落城前の大坂城内の模様を記述する。

徳川家康という狸爺は関ヶ原役に於ける戦勝を機に天下を統一し、影の薄くなった大坂方を恰も猫が鼠を追い詰めるが如き心境で虎視眈々、慶長十九年十月大坂冬の陣は起り、徳川勢は大坂城を十重二十重に取囲み、戦績不利と見て十二月に至り和平の交渉に入る。

此年の六月東山方広寺大仏殿の再興成り、八月三日所謂大仏開眼の大法要が厳修されたが、新鑄された大梵鐘に国家安康の鐘銘あり家康の運命を呪詛するものと、天海と称する悪僧の為にイチャモンが付けられ、之の件が導火線となって冬の陣は起つたのである。

大坂方は鐘銘の件を弁明する為片桐且元は大野治長の母大蔵卿の局と城目村渡辺内蔵助の母正永尼を同伴させ駿府へ差遣する。家康は和平の条件として、秀頼が諸大名同様に参勤出仕するか。秀頼を大名として他国へ移封させるか。

淀君が家康の側室となるを承諾するか。の三ヶ条であった。且元以下の使者は九月十九日帰阪し、其旨報告したのだが、城内は大変な騒ぎであった。茲で片桐市正且元の事を少し説明すると、彼は元來、毒饅頭や桐の一葉の物語で噂されるが如き誠忠の士ではなく、凡庸な小人であり、然も壮年の頃より淀君に対し不逞極まる横恋慕の志を抱くという、怪しからぬ男であった。事は天正十五年(一五八七年)十月一日に遡る。秀吉に依て催された北野茶の湯の当日、三十三歳の且元は淀君の艶姿を見て煩惱の炎を燃やし、慶長三年(一五九八年)八月秀吉六十三歳を一期に薨去以来頻繁に淀君に言い寄るが柳に風と受流され、殊に淀君は多情で多くの若侍と道ならぬ愛慾に耽るので且元は僻む一方であった。

且元が和平の使者に選ばれた理由は、彼が昨今謀叛の様子が見え、或は家康方に内通の疑いもあり、旁々淀君腹心のウルサ型女性二人を付け、接衝の様子により且元の心中を確める為の措置であった。その為且元の報告は大坂方を極端に刺戟して彼を裏切者として弾劾する声が出た。或者は且元に切腹を命ぜよ等の極論が出る位で、彼の二の丸東の屋敷は木村長門守や大野修理等の兵で囲まれたが、速水甲斐守其他七組頭の調停で漸く事無きを得た。然し且元は十月一日居城茨木へ戻つたが、大坂城を出る時一族郎党は三度大坂城を伏拝んだが、且元一人は振向きもしなかつた。

この神社仏閣の造営の一たる方広寺大仏殿鐘銘事件から端を発して、大坂役が起つたのは何としても皮肉と言わざるを得ない。慶長十九年六月方広寺大仏殿成り將に供養せんとする時に至り、その鐘銘に「国家安康」の句があつたので家康はこれを以て予を呪詛するものとなし、板倉勝重を以て片桐且元を責め供養を停めしめた。且元大いに驚き百万辨疏したけれども勝重は聞かなかつた。依つて且元は銘の撰者清韓を伴い自ら駿府に赴いて謝したけれども、家康は金地院崇伝、本多正純の二人をして且元を詰責せしめ鐘銘を磨潰すべきを命じた。一方大坂方にあってはこの形勢を憂慮し、乳母大蔵卿を駿府に遣わして謝せしめたところ、家康は親しく面会してこれを慰め、鐘銘のことなどは更に触れなかつた。やがて且元等は帰途に就き、途中且元は大蔵卿に家康の内意が秀頼または淀君を江戸詰とするか、大坂の囲替を為すかその一を選むべきことにあるを告げた。大蔵卿は大いに驚き、且元の心事を疑い、先んじて大坂に帰りこの趣を告げた。淀君大いに怒り、且元を誅して兵を挙げんとしたから、且元は危険の身に逼るを感じ城を脱してその邑茨木に帰つた。ここに於て物情騒然、十月淀君大野治長等と謀り、糧米を収め、檄を伝えて兵を挙げた。しかしながら当時これに応じたものは、真田幸村、長曾我部盛親、後藤基次、毛利勝永等で、封邑あるものは一人も応じなかつた。而して譜代の士ともいへば大野治長、治房

つた。此時彼の胸中では淀君に対する一生の悲恋が百八十度回転して悲痛な憎悪に変じたのであろう。兎に角慶長二十年四月よりの大坂夏の陣に且元の姿の無かつた事は事実で片桐且元の豊臣家滅亡の際に脱走して居た事は大略前述の如き次第であつた。

さて此の冬の陣に就て史書を摘記すると、慶長五年関ヶ原役後徳川家康は一諸侯の分際として勝手に諸侯を易置処分し、豊臣氏の蔵入は僅に摂津河内和泉三国の中六十五万石に過ぎざる一諸侯の有様になり、家康の態度は事毎に専恣を極めたが元來家康は、秀頼の後見であつたから、秀頼成長の後には政權を豊臣氏に返すものと信じていた。然るに慶長八年家康は將軍に補せられ徳川氏の幕府政治が名実共に具わるに至り大坂方の驚愕と憤怒は甚かつた。併し大坂方は之も一時的のもので秀頼成長の後政權を返さぬものもあるまいと萬一を期待していたが、慶長十年家康は奏して將軍職を子秀忠に譲り、愈々政權を秀頼に返す意志の無い事を示すに及んで大坂方の希望は全然葬られたものとなつた。

而も家康の豊臣氏に対する態度は極めて巧妙に、徐々に圧迫の手を強め、特に秀吉以來大坂城中財政の豊かなることを知つている家康は、まづ豊臣氏を内的に衰微せしめる手段として豊臣氏に勤め、秀吉の冥福祈願や家運の長久祈願のために盛んに神社仏閣の修造再建をなさしめたから、そのために消費した大坂方の金銀は実に莫大なものであつた。而し

てこの神社仏閣の造営の一たる方広寺大仏殿鐘銘事件から端を発して、大坂役が起つたのは何としても皮肉と言わざるを得ない。慶長十九年六月方広寺大仏殿成り將に供養せんとする時に至り、その鐘銘に「国家安康」の句があつたので家康はこれを以て予を呪詛するものとなし、板倉勝重を以て片桐且元を責め供養を停めしめた。且元大いに驚き百万辨疏したけれども勝重は聞かなかつた。依つて且元は銘の撰者清韓を伴い自ら駿府に赴いて謝したけれども、家康は金地院崇伝、本多正純の二人をして且元を詰責せしめ鐘銘を磨潰すべきを命じた。一方大坂方にあってはこの形勢を憂慮し、乳母大蔵卿を駿府に遣わして謝せしめたところ、家康は親しく面会してこれを慰め、鐘銘のことなどは更に触れなかつた。やがて且元等は帰途に就き、途中且元は大蔵卿に家康の内意が秀頼または淀君を江戸詰とするか、大坂の囲替を為すかその一を選むべきことにあるを告げた。大蔵卿は大いに驚き、且元の心事を疑い、先んじて大坂に帰りこの趣を告げた。淀君大いに怒り、且元を誅して兵を挙げんとしたから、且元は危険の身に逼るを感じ城を脱してその邑茨木に帰つた。ここに於て物情騒然、十月淀君大野治長等と謀り、糧米を収め、檄を伝えて兵を挙げた。しかしながら当時これに応じたものは、真田幸村、長曾我部盛親、後藤基次、毛利勝永等で、封邑あるものは一人も応じなかつた。而して譜代の士ともいへば大野治長、治房

兄弟、織田有楽、木村重成等がその主なる者で、総勢約十萬と称す。家康これを聞き、自ら駿府を発し、秀忠江戸を発し、総勢二十萬大坂城を包囲したけれども固より要害極めて堅固で、且つ幸村の真田丸を始め多くの出城を築いてよく防いだから大勢を決する如き戦も無かつた。依つて家康は講和を策し、これによつて城中の士氣を挫かうとし、本田正純に命じて謀らしめるところあり、翌元和元年正月に至つて和議が成立した。之を大坂冬の陣という。

新曲 日蓮



(以下次号)

小塩 梁水 作詞

妙法蓮華經 兩無妙法蓮華經と 御題目の聞え来る 上総の国に安置せる 清澄寺の本堂に 朝な夕なに身を浄め 唱うる声の有難き さらにも日蓮聖人は たつきにあえぐ衆生や思わぬ災難蒙りし 不幸の声や涙をす 無辜の民を救わんと 御題目の功德にて いやし給えと只管に 念ずる姿ぞ健気なる 寺を出でては街筋に 衆生を集めぬんごころに常に仏を念じなば いかなる悩みも救われん仏のみ手に連れよと 誠、表にあらわして 法蓮の道をぞ説き給う 人々大いに感激し 有難や法の道



明治維新の曙

辻 旭 城

御題目の功德をば 垂れ給われや上人と
両手を合せ伏し拜む 説法すみて上人は
寺に掃りて思う様 吾仏の説きし教文に
漸く帰依し参りしも 更に諸国を行脚して
修行せんとて寺を出で道中鉢鉢参らせて
鎌倉にこそ着きにけり上人街辻に立どまり
ゆききの人に呼びかけて心の安らぎ求めなば
仏を信じ身を信じ 仏の説かれし教文を
只一筋に念じなば 必ず救いの来たるべし
吾も御身等共々に 救いの手をば差伸べん
一心こめし説法に 聞き入る衆生一同は
喜び思わず跪く 明くる日も明くる日も
場所を変えての辻説法お上人よ、上人と
群がる衆生数知れず この事幕府の耳に入り
近頃旅僧日蓮が 街の辻にて法華経を
ゆききの人に流布せる由是をこの儘見逃せば
鎌倉幕府の威信にも かゝわる事ぞ遠やかに
引捕えんと武士は 打ち物手に手に馳せ参ず
やあ奇怪なり何事ぞ 鎌倉殿の御府内に
広宣流布とは不届者 斯かる所業な許されず
それ引立てよ一同は日蓮目掛けて打かゝる
日蓮僧都は見るよりもとより法華経広めなば
鞭も打たるは覚悟の上いざ伴なわれん人々と
泰然自若の上人は ゆるぐ気色も見えざりき
それと見るより武士一同情け容捨もあらばこそ
持ちたる鞭にて日蓮をハッシと許り打据えぬ
吾若しこゝに死するとも只み仏の加護により
信ず法華経の功德にて有難御曼陀羅を掲ぎつゝ
死しての後も広宣流布吾に続く人々が
北条執権時頼の 日毎の敵しき御詮議に
身体は頓に衰えど 御題目を念じつゝ
その身は伊豆へ移されぬ

明治維新を契機として、鎖国封建から開国文化の「近代日本」が生れた。明治二十七年八月日清戦争、三十七年二月日露戦争、そして昭和十六年十二月には太平洋戦争、二十年八月十五日終戦の玉音放送で戦い終結。琵琶界でも、戦前は国粹宣揚の波に乗り、巧みに忠君愛国を採り入れ関西人のど性情を強化したものである。当時大阪で活躍した琵琶人は旭会松岡旭岡、中島旭翠、橋山崎旭翠、光田旭扇、錦心流馬瀬槍水、桃木耳水、薩摩一柳岳昌、松本天晃らの各師で、今日の関西各流琵琶の偉容と繁栄を築かれた。先輩が残されたこの偉業を我々は継承し、更に琵琶を通じて国粹保存への躍進をめざして住みよい日本、明るい国家の建設に努力したい。茲に「明治維新の曙」と題する一文を執筆したが、京絃誌と琵琶界の発展を念じつゝ、此上とも諸先生方のご協力をお願いする。
慶応三年秋十月、徳川十五代將軍慶喜は大政奉還を申し出た。鴨の河原に肌寒い風が吹き渡り、時雨がはらはらと降る十二月九日、新政府は王政復古の宣言を発したが、政局は激しく流動しながらその年は慌しく暮れた。

明けて四年正月二日、大阪商人の街でも初詣での町人達が忙がしげに行きかう中で、旧幕臣と会津、桑名の連合将兵は大阪をたつて京都へ進撃を開始した。記録によるとその数約一万五千、目的は薩長軍を一挙に駆逐し、政局の主導権奪回を企図したものであるが、わけても慶喜に対する新政府の処遇が彼等をいたく憤激させたのである。翌三日の夕刻から四日にかけて両軍は京都南郊の鳥羽、伏見

来たる八月一日発行の本紙は例年の通り夏季特別号とし紙数を増して内容豊富の記事を満載、併せて暑中交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

夏季特別号発行について
遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京絃援助の思召しをも含めて多数御協賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添え七月十日迄に御申込み願ひ上げます。

大激戦を交えたが、数に於て三倍する旧幕軍も薩長側の士気と装備に敗れ、その上味方と頼む淀、津両藩の離反に逢い、総崩れとなって退却した。
事ここに至つては英明を謳われた慶喜も最早打つべき手段もない。一月六日の深更、僅かに重臣数人を従えて大阪城を脱出し、旧幕艦開陽丸で海路を急ぎ江戸に帰った。敗戦の將兵達はなだれを打って大阪に逃げて来たが、

前將軍は既に帰東したと知り忽ち四散した。しかし政府軍は急追しなかつた。旧幕軍は政局の動向を見極めながら大阪籠城の兵備を整えたのであった。

政府軍は九日早朝京橋口に進入して、門内の仮兵營に大砲を撃ち込んだ。火の手は見る見る拡がり本丸台所も火を発した。人けの殆どない城内のことゝ消し止める術もない。焔は燃えさかるまゝに本丸、里丸を焼きつくし、三の丸も辰巳、丑寅の両矢倉も焼け落ちた。加えて火薬蔵も大爆発を起し、まる二日間燃え続けて十日の夜漸く火の手が鎮まり、豪華絢爛を誇った流石の大阪城も、僅かに二の丸の四つの矢倉と大手門だけが残った。

前將軍は既に去り城はあらかた焼失し、取締りの役人も江戸へ引揚げる。市内は全くの無警察状態で大混乱に陥った。家財道具を背に行き交り者、逃げまどう老幼婦女子、暴民達は城中に乱入して衣類や米麦、武器建具まで持ち出した。こうして町々で乱打される半鐘の音を地音に、火事と混乱と掠奪を序景として、近代大阪の幕は開かれた。

鳥羽伏見の戦いに始まる戊辰戦争は、倒幕派のかねての思惑通り旧幕勢力を潰滅させる絶好の機会であるが、生れたばかりの新政府にとつては重大な試験の時でもあった。西南諸藩は既に新政府に帰順はしていたが、情勢次第では離反する藩も出よう、慶喜こそ恭順の意は表しているものゝ、江戸市中を始め関東、東北や越後では、旧幕派が勢力を得て薩

長に對し激しい敵意を燃やしている。新政府の名のもとに、その実薩長の幕府になるのではないか、との疑惑が根強かつた。

斯く情勢は未だ樂觀を許さなかつたとき、新政府の参与大久保利道は将来の方針について大略次のような建白をした。「天皇が敵を親征される為大阪に巡幸してこゝを行在所とし、朝廷の因襲を捨て、外国との交易の道を開き、陸海軍を整備するのが急務である。」と。新政府軍の東征が、幕府に對する薩長の私闘だといふ世評が高かつたので、大義名分を立てるために天皇親征を打出したのだが、實際は行在所という名目で大阪遷都を企図していたのであった。

元来大阪遷都の主唱者は尊攘派の平野國臣、真木和泉らで、彼等の主張を要約してみると
(1) 人心の一新をはかる。
(2) 大阪が要害の好適地である(これは内乱の発生を予期してのことであろう)。
(3) 大阪が海に臨み第一の経済都市である。
この建白書をめぐって水戸孝允らは賛成したが、天皇の外祖父中山忠能公をはじめ公家側が強硬に反対し、中でも前越前藩主松永慶永や有力な諸侯達にも薩長への反感から之に同調した者が多く、為に遷都は暫く棚上げとし、大阪親征だけを挙行することにした。処が口さがない京童の常か、薩長が天皇を藩地に迎えて天下に号令するのだ、という浮説が広まり、延引を重ねて漸く実現したのは三月二十一日であった。



祝京絃創刊

二十周年 (二)

市来 芦村
二十一年と一口に申せど永い間の御奮闘只只感激の外ございません。御祝い申し上げます。

北 尊 水
祝京絃創刊二十周年。

生重 定
京絃二十周年をお祝い申し上げ今後益々御発展を心より祈り上げます。その内拙稿の筆をとり度く存じ居ります。...

伊藤 馨 水

京絃創刊されて早くも二十周年を迎えられ年月の早さに驚き居ります。二十年の永きに亘り一回の欠刊遅刊もなく発行された御努力を思うと只「創刊二十周年お目出度う」と申し上げただけでは到底満足な祝詞にならぬように思われてなりません。...

な美麗な本が送付され、今も時折開いて見る度に植村主幹の琵琶界に対する熱意に感銘を深くする次第であります。(中略) 茲に京絃二十周年を深く祝福し琵琶界発展の為今後一層の御努力を希うと共に主幹の益々御健康を念願いたします。

大井 錦 淀

刻苦精勵一回の休刊もなく遂に輝かしき二十周年を迎えられ先生の感慨如何ばかりと拝察いたします。毎月初旬必着の京絃は斯界に確固不動の地位にあり毎号有益な内容にて楽しみ居ります。今後一層の御発展を祈り上げます。

高橋 蘇 水

今回は御社創刊二十周年を迎えられお目出とう存じます。今後一層の発展を祈ります。

伴野 鶴 風

二十年と一口に云っても仲々永い年月を御苦労なされ斯界の為に御尽力下され同志としても慶びに堪えません。益々京絃社の御発展をお祈り申し上げます。

山口 豈 水

京絃十周年を称える多くの人の祝詞の載っていた京絃紙を読んだのはまだつい此頃の様に見えるのに、その京絃が本年でもって二十周年を迎えられるとは、月日の経過するこ

との早さに驚くと共にこの長年月を一回の休みもなく刊行を続けられましたこと心から敬服致しますと同時に琵琶界に、いや琵琶人のほんの端くれとして衷心より深甚の謝意を表する次第でございます。(中略) 近頃なまけている私が兎や角放言するのは甚だ恐縮の次第ですが、日々衰え行くとも見られる琵琶界の有様は誠に淋しい限りと存じます。「京絃」「芸の友」両紙に昨年一月から今年三月迄に掲載された物故琵琶人は

上山旭寿、東 錦堂、船木吹水、内田豊水 田辺錦波、杉山清峰、大滝旭雄、柴田旭栄 青山旭光、水藤錦樓、北堀省水、瀬戸頌水 蔵本司水、小林捷捨、中村旭登、吉成登城 高橋洋水、高野旭風、伊藤岳英、古田耕水 柿本錦城、以上二十一名で、この他に記事にならなかつた琵琶人も何人かある筈で、これだけでも琵琶界の力が段々弱まって行くことがわかると思う。しかもこの減勢力に対する補充は皆無と云っても過言ではないと私は思っている。

二二七―二三八号連載の起生回生策の記事中、現状を心配されいろいろお考えになつてゐる執筆者の方には敬意を表しますけれどもあの方法で回生出来るとは私は思いません。最早一般大衆から完全に離れたと云つても長い程に退潮した琵琶を古の様に隆盛にすることは先づ不可能に近いと見ています。琵琶を今日の状態に導いたのは種々原因もありましたが、何かしら近頃国民の間に強まってい

大企業批判の要因と相似通つたものがあるようです。演奏会の開催も年々少なくなり入場者はいつも大体同じ顔ぶればかりという状態は今後も尚続くことでしょう。

論争する気持はありませんので詳述致しません。只私個人の所見を少し附記した次第どうぞ御笑読願いたく存じます。

定期刊行物を長く続けるということは編集の御苦労は勿論ですが、それにも増して定時に発行する為に支障のない様にと御自身の健康保持に御留意なされたこと又一入であったものと推察致します。どうぞいつ迄も御自愛の上琵琶界の燈台として末長く光り輝いて頂きますようお祈り奉々御願ひ申し上げます。

森 田 長三郎

京絃二十周年をお祝いし益々御発展と御自愛のほど祈り上げます。

田 中 歴 水

御紙二十周年を迎えられ益々御発展を祈り上げます。

琵琶を

四月二十一日昼一時伊丹市公民館で開催、風雨の強い悪天候を克服して一同集合、高鳴呼水氏からテレビCMに御子息夫妻と共に出演された報告のあと抽籤により山本五十六元帥、松原絹水、城

山一浅見汀水、小栗栖一番匠渚水、橋大隊長一牛駒旭典、敦盛一高鳴呼水、吉野懐古一田中敷水、白虎隊一佐々木寒水、羅生門一野尻撰水、以上演奏後民謡、漫談等で愉快な半日を送った。

立川市琵琶研究会

五月五日昼一時立川市中央公民館。桜狩一石黒錦歌、橋大隊長一伊藤馨水、本能寺一小川吐水、井伊大老一中島瀑水、新撰組一村木桜柳、川中島一小峯妖水、石童丸一坂井眺水、元寇一清水源城。

武絃会

一水会多摩 五月十二日一時小支部合同研修会 金井市福祉会館。白虎隊一中村修水、井伊大老一中島瀑水、乃木将軍一坂本錦道、忠度一伊集院敷城、石童丸一石井效水、山科の別れ一篠宮櫻水、西郷隆盛一伊藤馨水、彰義隊一清水源城、別れの盃一小川吐水、新撰組一村木桜柳、七時閉会。尚六月は十六日同所で開催の予定。

吟流吟詠会

五月十九日昼東京中野サンプラザホール。榎本芝水、都錦穂、笹川鎮江諸氏が岩井半四郎、霧島昇その他と共に特別出演した。

奥伝 披 露

五月十九日昼静岡中央公民館。主催一水会静岡支部。国船一長谷川、七卿落一杉山、城山一海野、

桜狩一前田、竜の口一杉山禅水、橋大隊長一広任秋水、常陸丸一奥伝披露藤波声水、白虎隊一同竹林深水、羽衣一同竹林詩水、満蒙開拓義勇隊一控村笛水、三方ヶ原一原夏水、河井蒼竜窟一村磯棲水、湖水乗切一仁王深水、羅生門一堀江疆水、毒籠頭一小川野水、(以下来賓)川中島一國府田謡水、井伊大老一平野証水、戦艦大和一中谷裏水、景清一広瀬織水、小栗栖一会主太田杯水。

加藤 錦 陽

五月十九日昼三鷹市教育会初夏演奏会 館。月下の陣一三浦、若き敦盛一前川・中村、戦艦大和一福元・正木、城山一本橋錦彌、須磨の春一石井效水、本能寺一中島瀑水、加藤喜水、西郷隆盛一伊藤馨水、桜狩一宮崎洲香、石童丸一水藤五郎、お市の方一藤波桜華、母常盤一中村修水、井伊大老一村木桜柳、船弁慶一加藤錦陽、道成寺一広瀬翠紅、うつぼ猿一新部桜水、安宅一若宮旭登、恩讐の彼方へ一長谷川錦舟、石田脩水、白虎隊一前田洲月、堅田落一來賓若水桜松、吟詠一中村松声。

晴 風 会

五月二十六日夕六時一九時東泉月例会 京杉並区高円寺会館。主催浅野晴風会。菅公一近田、桜井の駅一太田尾、送別一諸、城山一本橋錦彌、桜狩一野口嶮水、別れの盃一福島勝水、月下の陣一山口豈水、川中島一青木晴城、衣川一関英子、舟弁慶一加藤錦陽、城山の月一緒方晴舟、茨木一杉